頭塔（ずとう）は、奈良市高畑町にある土製の塔。１辺 30m、高さ 10m、７段の階段ピラミッド状の構造をしている。奈良時代の建造で、東西南北の各面に石仏を配置する。1922 年（大正 11 年）、国の史跡に指定された。
『東大寺要録』では、７６７年、奈良時代の僧、実忠によって造営されたと伝えられる。そこでは「土塔」と表記されており、五重塔と同じように仏舎利を収める仏塔と考えられる。

頭塔はまた僧、玄昉の首塚という伝承もある。玄昉は吉備真備らとともに遣唐使として唐に渡り、帰朝後 橘諸兄（たちばなもろえ）政権の担い手として活躍したが、藤原仲麻呂によって九州へ左遷され任地で没したと伝えられる。後の平家物語に
『…観世音寺、供養の導師には玄房僧正とぞ聞えし。高座にのぼり、敬白の鐘うちならす時、にわかに空かきくもり、雷おびただしく鳴って、玄昉の上に落ちかかり、その首をとって雲のなかへぞ入りにける』とあり、この首が天空を飛来して奈良に帰り、玄昉のたたりを恐れた人々が首塚を建立して埋めたという。

頭塔の各段には、浮彫（一部線彫）の石仏が配置されている。石仏は当初、東西南北の各面に 11 基ずつ、計 44 基設置されていたものと推定されるが、現存するのは２８基。当初から露出していた 13 基が 1977 年重要文化財に指定され、2002 年にはその後の発掘調査で見出された石仏 14 基のうち 9 基が追加指定された。東・西・北面の石仏は復元整備後、屋根付きの壁龕に安置されているが、南面の石仏は土の上に直接置かれている。

「頭塔」に関する私的考察、頭塔が語るものとは何か。

仏塔　　仏塔は、釈迦が荼毘に付された際に残され仏舎利を納めた塚のことで、サンスクリット語でストゥーパと呼ばれ、塔婆（とうば）、あるいは塔ともいう。

　ストゥーパは漢の時代に中国に伝わり、木造建築の影響を受けて形が変わった。その後、日本に伝わり、五重塔・三重塔、多宝塔など、木材（檜など）を使って寺院建築の一つの構造物として建てられるようになった。

　一方、東南アジアでは、インドのストゥーパの形態がほぼ忠実に引き継がれた石造建築物の仏塔が作られたが、しかし一方で、本質的に全く違ってものになっていった。それは遺物を納める「器」ではなく、釈迦が住む「家屋」であり、信者が出入りする建築物になっていった。インドネシアのボロブドゥールはそのような東南アジア型仏塔の世界最大の遺跡である。

ボロブドゥール遺跡　　ボロブドゥールは、寺院として人びとに信仰されてきた建造物であるが、内部空間を持たないのが特徴となっている。最も下に一辺約120m の基壇があり、その上に５層の方形壇、さらにその上に３層の円形壇があり、全体で９層の階段ピラミッド状の構造となっている。総延長５km におよぶ方形壇の回廊には、回廊のくぼみに 504 体の仏像が置かれている。

　ボロブドゥールは、それ自体が仏教的宇宙観、とくに密教的宇宙観を象徴する巨大な曼荼羅といわれ、一説には、須弥山を模したものとも考えられている。

頭塔は東南アジア型のストゥーパが日本に伝わったもの　　このボロブドゥール遺跡が完成したのは 780 年ごろ。日本の奈良時代で頭塔が構築された頃である。

　頭塔は規模の違いはあるものの、内部空間を持たない寺院形態、階段ピラミッドの形状、回廊に配された仏像など、東南アジアに伝わったストゥーパの形態によく似ている。頭塔の置かれた位置は東大寺大仏殿からちょうど真南の位置、それはボロブドゥールのことを知った遣唐使によって伝えられたに違いない。そして天平の時代が終るとともに忘れられた、蛭子のような仏教施設であったに違いない。　　（資料　パンフレット、インターネット）